

---

---

「わが国における津波伝承としての石碑を問い直す」

前林清和（神戸学院大学人文学部教授）

---

---

**弘末：**続きまして、3番目のご報告に入らせていただきます。3番目は神戸学院大学人文学部の前林さんに「わが国における津波伝承としての石碑を問い直す」というタイトルでご報告いただくことになっております。前林さんは、防災社会貢献あるいは国際協力のご専門でいらっしゃいます。カンボジアで国際貢献事業に関わっておられます。それでは、どうぞよろしくお願いたします。

**前林：**ご紹介いただきました神戸学院大学の前林です。私は「わが国における津波伝承としての石碑を問い直す」ということでお話させていただきます。高藤先生とこの3年ほど一緒に共同研究をしているのですが、私は日本の災害文化と関わる中で話しをしていきたいと思っております。ただ、今もご紹介いただきましたように、カンボジアですと初等教育支援をやっている他に、国際緊急援助隊の隊員で、スマトラ沖地震の時には国内で待機していましたが、アルジェリアの地震では出動しております。それは自分の研究とは別に、ボランティアとして国際緊急援助隊の隊員をやっています。

また、東日本大震災も20数回ボランティアに行っておりまして、その他、毎月学生を被災地に派遣していますので、特に東日本大震災との関連の中で災害文化を考えていきたいと思っております。

ところで、わが国は、日本は災害大国と言われるほど、幾度となく大規模な災害に見舞われています。私も阪神淡路大震災では被災しました。したがって、わが国では、様々な地域で口伝とか物語的な災害文化が形成されてきましたが、今回は津波の石碑について、未曾有の被災をもたらした東日本大震災における津波との関連について話をさせていただきます。

よく様々な報道で、東日本大震災に際し、「教訓が生かされなかった」と言われています。どうということかという、過去に明治三陸地震があり、昭和の三陸地震もあって、そのときに大きな津波が来ております。その時の「教訓が生かされなかった」と、よく報道とかで言われますけど、私は決してそうではないと考えています。

何度も被災地行っていますが、関西とか関東の人たちが想像もできないほど、東北の太平洋岸の地域の人たちは、徹底的に災害対応をしてきたのです。昭和の三陸地震の後、高台移転も何箇所かでやっています。世界一の防波堤、後でお話しします防潮堤もすごい物があります。避難訓練も徹底的にやってきました。宮古に行ったときも、3月5日に津波用の防災訓練をやっています。そして、11日に津波が来たのです。

関東や関西では考えられないほど避難訓練を、町をあげてやってきたのです。防災教育も相当徹底してやってこられました。災害文化伝承も後でお話ししますが、石碑も含めて非常にたくさんあります。それと、ハザード避難マップとか看板とかも町のいたるところにあります。「ここまで明治三陸沖の津波が来ました」とか、「昭和の三陸沖の津波がここまで来た」というような看板や標識が町にいたるところにあります。相当、津波が来るであろうということを想定してやっておられたということです。決して、教訓が生かされなかったわけではないのです。

ただ、東北地方の人たちは、今言ったように決して過去の教訓を忘れたわけでもないし、ないがしろにしてきたわけではないのですけれども、やはり悔いは残ります。なぜなら、人間は、完璧なことができなかつたら、もっと自分が何かできたのではないかとということで自問自答したり、後悔したりするものです。ただ、そのことは「教訓が活かされてなかった」ということとは違うわけです。ということで、将来の災害をなくすために何ができるかという視点で考えていくべきだと思います。

では、何故、教訓が活かされていたのにだめだったのか、たくさんの方が被害を受けたのかということ、明治三陸沖は津浪災害の到達時点が大船渡市の綾里というところで**38.2m**まで上がっています。昭和三陸のときも同じ綾里が最高地点まで行って**28.7m**です。チリの津波のときは三陸で**6.4m**ほどの津波ということでした。

今回の東日本大震災は宮古姉吉地区で、**40.5m**まで遡上しています。想定外にとてつもなく巨大な津波だったということなのですね。教訓が活かされなかったというよりも教訓を超えたわけです。津波の高さを見ていくと、姉吉よりも高い宮城県の女川の**43.3m**というのが確認されています。ただ、ここは一応無人島ですので、一般的に言われるのは**40.5m**の方です。軒並み**30m**とか**20m**とか越えているわけです。簡単に**40m**と言いますが、**40m**と言えは**13**階建てぐらいのビルの高さです。そんな高さまで津波が来ているわけですから、とんでもない状況だったわけですね。

こういう津波が襲ったわけですが、例えば荒浜地区と言って仙台の海側では、高級新興住宅地で、ずっと街並みが続いていたのですが全滅しました。今回の震災前からある津波の危険を知らせる看板には、危険区域が記されていましたが、実際はその何倍も内陸にまで津波が押しよせて、高速道路で津波が大体止まったのです。さらに一部は高速道路をくぐり抜けて内陸に入っています。

また、皆さんもご存じのように釜石には世界一の防波堤がありました。これはギネスにも載っていた防波堤です。これがことごとくつぶれたわけです。これも明治、昭和の大津波を教訓として国が威信をかけて造ったものですが、今回の津波はそれを超え、潰して押し寄せてきたのです。

さらに、宮古市の田老というところ。これも世界最大の防潮堤があります。町の中に二重にわたって**10m**の防潮堤を建てていたのです。異様な風景です。それほどして津波に備えてきたわけですが、その防潮堤が潰れて町が全壊したわけです。世界一の備えをしていてもこういうことが起こってしまったのです。

大槌町も町が壊滅したので有名ですが、吉里吉里というところがあります。ここは、高台移転を昭和の大津波の後に実施した場所です。昭和の大津波のときに大槌町は確か**5~6m**の津波が来ました。だから**7~8m**のところを高台移転したのですけれども、今回は**15m**ぐらいの津波が来ましたので壊滅してしまいました。釜石市の両石というところも同じように、教訓に基づいて高台移転した所なのですが、それ以上の津波が来て壊滅してしまいました。

津波の遺跡も、明治の大津波、昭和の大津波の後に青森、岩手、宮城で津波遺跡、石碑と言われるものが**317**基、建てられています。しかし、今回の津波によって多くの石碑が流出したり倒壊したり浸水してしまったのです。これもさっきから話しているように、規模が違ったわけです。今回の津波は、過去の教訓では対応しきれないほど大きな津波が来てしまったということなのです。

関西学院大学の北原糸子先生の宮城県内の石碑を調査によると、県内だけで津波の石碑が 67 ありました。ただ、津波の石碑が圧倒的に多いのは岩手県です。なぜかと言うと、明治と昭和の地震のときの津波の中心は岩手県でした。岩手県の被害が圧倒的に多かったのです。特に明治の津波の後に 113 基の石碑が建てられました。

昭和の津波のときは岩手県も宮城県も相当多くの石碑が造られています。これは、朝日新聞が石碑を建てるために義援金を集めてすぐに被災地に送ったからです。「石碑を建てるために使ってください」と、組織的に活動したので、岩手県、宮城県に、たくさんその石碑があります。

ところで、明治の津波のときは、供養というかたちの石碑が多かったのですが、石碑の位置が津波の到達した地点ということではないのです。昭和の津波のときは、原則、「ここまで津波来ました」というような、いわゆる警告とか警鐘するための石碑ですので、津波が到達した地点、大きな被害が出た最終段階当たりのところに石碑が建てられていました。

そういう中で宮城県の 67 基の石碑は、私がいろいろ調べた結果、流出したり倒壊したりして現在立っているのは 27 基だけなのです。さらに、今でも建っている石碑もほとんどが浸水しています。まだ 8 件ほど確認できていませんけども、67 のうち 55 が「昭和の大津波のときにここまで津波が来ました」と、大体それを目安に置いてある石碑を越えて津波が入ってきているのです。つまり、石碑を目安にしていたらだめだったということです。それほど今回の津波は大きかったということです。なお、浸水なしの 4 基は今回の震災以前に山の上の公園などに移転したとかいうことで残っているということです。つまり、ほとんど地域で教訓を超えてしまう津波が襲ったということです。

その中で、これも世界的に有名になっていますが、宮古市の姉吉地区はその教訓が生きた場所です。姉吉は明治のときも 38m ぐらいまで津波が来ました。多くの方が亡くなって、昭和のときもたくさん亡くなって、それ以降ここに石碑が建っており、「ここよりも下に家を建てるな」というように、今も残っています。それに基づいて姉吉地区の方は、この石碑よりも大体 40~50m 上のところに家を建てて、300~400m ぐらいずっと坂を下りて行ったところに漁港があるのですが、そこには加工場だけがあって住まいは高台ということで生活されてきたのです。

ただ、残念なことに一家族亡くなくなりました。2 人の子どもを迎えに行ったお母さんが車で戻って来るときに津波にさらわれてということで 3 人が亡くなりました。他の方に被害はなかったということです。この石碑の 30m ぐらい下のところまで今回の津波は来ましたが、住宅地域は無事だったということで、ここは教訓が活かされた場所です。

それと、大船渡の綾里というところも明治・昭和の津波で多くの方亡くなられたのですけれども、その後高台移転してここも今回免れました。

もう 1 つ吉浜というところでは、ここも高台移転をして免れたところでは、ここは実はその石碑は倒れたのです。今、直して土台を新しくしておりますが、震災後に修復したのです。ぎりぎりのところで無事だったという地域です。この地区は住宅地域の下はずっとゆるやかに浜になっていて、もともと家だったところを田んぼにしております。コンパクトに何十軒が吉浜地区は集まっており、自分の家から海も漁港も全部見渡せるわけです。空間的なコミュニティも含めて完結した状態なので、これからの防災まちづくりの参考になる良い事例だと私も感じています。

東日本大震災を通して分かったことは、津波石碑の限界というのは過去の経験を超えた場合

には対応しきれないということです。実際に今回は、それが起きてしまった。また、都市化に対応できないというのもあります。例えば、一番多くの方が亡くなられた地域は石巻市なのですが、15万人ぐらい人口があって、海から何kmも平坦なところが続いて、しかも大きな町で人の出入りが多いですから対応しきれないというのはどうしても出てきます。あと、逆に過疎化に対応できないということです。三陸沖は過疎化がどんどん進んでいます。高齢化も。そうすると、文化自体がなかなか伝わりにくい。さらに、今回の東日本大震災で、過疎化どころかほとんど人がいなくなっている地域があります。先月も行ってきましたが、石巻の雄勝町は日本の硯の90%作っていた産地ですが、リアス式海岸がずっと続き、1つ1つの入り江が小さな漁港で50世帯、100世帯というように小さな部落が点在している所です。人口は4,500人ぐらいいたのですが、今1,200人ぐらいしかいません。亡くなられたのは300人弱ですが、家は9割近く壊滅して、1,500世帯ぐらいあったのに残ったのは200世帯ぐらいです。ほとんど津波にさらわれてしまって何もありません。ですから、急峻で高台移転もほとんどできないということで住民の方は散らばって、仙台とか都会の仮設に行っておりますので、ほとんど人がいない。特に子どもたちは全然いません。なぜかと言うと、4つある小学校の内3つが津波でなくなってしまったのです。しかも、病院も商店街も何もかも津波で無くなってしまったのです。生活も教育もできない状態です。だから、小学生や中学生のいる親は全員、学校があるところに移転していますので、災害文化が残るとか残らないとかいう以前に、村が残るのかどうかという問題が出て来ています。

世代が替わるごとに防災意識が薄れていくというのは世の常です。ここをどうするかということ。あと、石碑単独では災害文化とはなり得ないのではないかということです。東日本大震災の被災の分析をして、災害規模に比べて教訓は相当程度生かされたとは思っています。津波被害は「忘れたころ」ではなかったと。被災地の自治体も市民たちも相当備えをしていました。今回の地震は、99%来ると言われていましたので、相当みんな色々な対策はしていました。防波堤、防潮堤、避難所。避難所も決めてやったのですが、津波にさらわれたところがいくつもあります。石碑も多くはさらわれてしまったということなのです。

ところで、今回の教訓として、「てんでんこ」ということが見直されて、地震が起きたら津波が来るので、何が何でも身内もみんな見捨ててとりあえず自分だけ逃げろということが言われています。周りの人を助けず自分がとりあえず助かれと。けれど、今回やっぱり、自分の身内を助けたことにより、消防団の人は多くの市民を助けたことにより多くの方々が亡くなられました。同時に助けられた人も沢山います。「てんでんこ」をしなかったことが、だめだとか良いとかという話しではないですよ。もちろん、「てんでんこ」は原則ですけれども、人それぞれ生き方がありますから、それを強制するようなものでもないとは思っています。

それと、これだけの津波は日本の車社会で起きたのは初めてだということです。車で逃げたのはおろかだという言い方もありますが、私でも車で逃げたかもしれません。何kmも先のところを走って逃げられないですから。私も母親と住んでいますし、歩くこともできませんから、歩いて逃げろというのはなかなか難しい話ですね。そういうことを考えると、これは教訓というよりも初めてなのです。車社会になって渋滞して車が動けなくなったところに津波に襲われてたくさん亡くなられました。ですから、そういうことも含めて、これからの課題だと思っております。

どうすればいいのかということですが、例えば、今回は石碑の話が中心ですから、そ

の石碑と教育の組み合わせだと。学校教育、社会教育、家庭教育の中で協力をしていけないといけないだろうということです。石碑と音楽との組み合わせ、まさに「Smong」のように、そういうものが学校教育の中で組み合わせたら良いと思います。

実は、日本でも一時東北で、歌で残されていたところがあったそうです。今調べているところですけど、今は残っていません。やはり、音楽との組み合わせというのは大きいかなと。それと、年中行事に組み込んでいくということ。また、石碑のメンテナンスが大切です。やはり石といえども朽ち果てていきますからメンテナンスをしっかりと地域や行政がしていけないといけないのではないかと思います。

私はいつも学生にも言っているのですが、他国への災害支援活動が一番重要なのではないかと。どういうことかと言うと、「災害は忘れたところにやってくる」というのは自分の地域のことを考えているから忘れたところにやってくるわけです。自分が住んでいるところが、例えば 50 年に 1 回、100 年に 1 回、1,000 年に 1 回かもしれないですけども、日本国内を見てみると、毎年どこかで大きな災害が起きています。世界中を見たら、500 人以上亡くなるような災害は 1 か月に 1 度くらいは起きています。

つまり、ちょっと視野を広げたら、いつもどこかで大きな災害が起きており、その地域に支援活動をすることで、災害意識、防災意識が薄れていかないという考え方です。自分のところだけだと、だんだん薄れて行く。災害は忘れたところに…ということになる。視野をいかに広げ、それに支援していくかが、私は災害、防災意識の継続、意識を高める方法だと思います。そういうことも含めてもう 1 つ。最近特に災害の規模が大きくなっています。今回の東日本大震災だけじゃなくて、いろんな災害で「今までこんなところまで水が来たことがなかった」とか、「今までこんな大雨が降ったことはなかった」というのは、温暖化の関係かもしれませんがよく耳にします。また地球が活動期に入っているということもありますので、今までの経験とか教訓を超える可能性が高いということですから、教訓をもとにいかに関係性を発揮して臨機応変に対応できるかと。より大きな災害になることを想定し、臨機応変に対応できるような人間の防災力を強化していけないと、災害は減っていかないのではないかと、減災に結びつかないのではないかとということで、私の話とさせていただきます。どうもありがとうございました。

**弘末:** 東日本大震災の津波の事例で、石碑を問い直す、ご報告を前林さんよりいただきました。ご質問はいかがでしょう？時間を少し超過しておりますけれども、ご報告の皆様に対して、言い忘れたこと等ありましたら合わせていただきたいと思います。

**フロア A:** 今、車社会での防災をお示しいただいたのですが、この防災における文化、車社会においてどのような対応策を取るかというソフトの部分と、領域的に社会インフラの方に、車社会となると徐々に入ってくるのではないかと思います。そのあたり等々、単体ではなかなか難しいというような見方が、皆さんご発表の中で統一した見解ではないかというふうに伺っておりました。

私、非常に大きな悩みを今持っております。将来に向けて、防潮堤、堤防等のいわゆる物理的な物等をどのようにこれからとらえていけばよいのか。それぞれ研究者の皆さんも含めていろんな意見があるとは思いますが、あくまで私見の範囲で結構なので、どのようにおとらえになっているかというのを、ぜひ伺いたいのですが。

**前林**：防潮堤、防波堤は、もちろんある程度まではと思いますけれども、例えば、今回の津波を考えたら 20m ぐらいの防潮堤、防波堤を造らなきゃいけないということになると、ほぼ不可能です。もちろん何もなしだと津波だけでなく高潮も含めて対応できませんので、ある程度は必要でしょうけど、やはり、ハードだけじゃなくていかにソフト的なところで、システムとか人間の意識の問題とかで対応していくかを本気で考えていかないと。

特に南海トラフが動いたら、高知県で 5 分、和歌山の串本だと 2 分で津波が来ます。今回、東日本大震災は 20 分、30 分でしたけれども、2 分と言われたらほぼ逃げられませんし。ですから、そんなことも含めてどうするのかもありますし、防潮堤、防波堤をどうするのか、逃げ方をどうするのかということは、実はその地域ごとに違ってくると思いますので、それを個々に考えて対応策をきちっとやっていかないといけないと思います。もちろんハードは大切ですけれども、どちらが保管するかと。逆にハードの方が保管の方になるのかもしれないと私は思っています。

**弘末**：どうもありがとうございました。